

茅ヶ崎 自然の新聞



19年6月号(276号) ○

【編集・発行】

茅ヶ崎市文化資料館

〒253-0055

茅ヶ崎市中海岸2-2-18

TEL&FAX: 0467-85-1733

Mail: shiryoukan@city.c

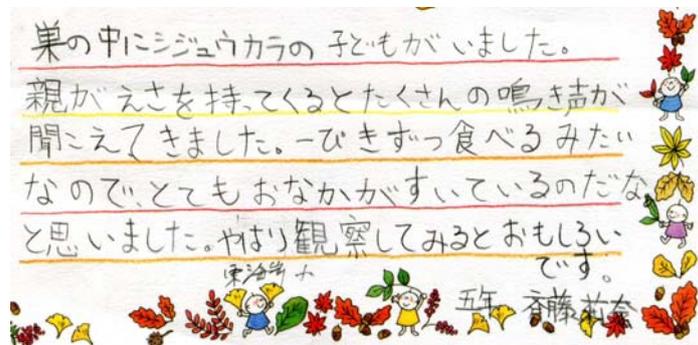
higasaki.kanagawa.jp

http://www.city.chigasaki

.kanagawa.jp/newsection/s

hougaku/shiryoukan/

シジュウカラの子育て



昨年の巣立ちのときは、カラスに狙われたり、ネコに狙われたりと恐ろしい思いをしたので今年の巣作りはどうなることかと案じていましたが、親鳥が巣の中に入るのを確認して、無事に雛がかえってくれることを祈っていました。

4月に入ると鋭い鳴き声で交代しあう間隔が長くなり、きっと卵を温めているのだろう、と主人と話し合いました。

4月末、巣箱の下を通ると雛の声らしいものが聞こえてきました。そして親鳥たちが忙

しく出入りする回数もふえてきました。いよいよ雛への餌運びになったかと思うと嬉しくなりました。

日を追うごとに雛の声も大きくなり、運ぶ餌も大きくなってきます。時折、白いものを口にくわえて飛び出すのを見かけます。きっと雛の糞でしょう。シジュウカラは、雛の糞で巣を汚すことはありません。

5月5日、孫に声をかけ親鳥が巣箱に入る様子を見せました。

(東海岸南 齊藤溢子)

小出川の自然観察

3月20日、3人で青い空に富士山の冠雪が映えて美しく見える朝、浜園橋から上流を歩きました。この2、3日は冬型の気候で、最高気温は13℃と風が冷たい日でした。

浜園橋から歩き始めると、セイヨウカラシナの黄色の花が所々に目立っていました。先月も見られたヒメオドリコソウ、オオイヌノフグリ、ホトケノザ、ノゲシなどが元気良くあちこちに咲いていました。

一緒に歩いていたFさんが、1年前に見つけたというヒメウスが咲いていないかと探すと、昨年と同じ場所に、少し色褪せた状態の株をTさんが見つけてくれました。少し歩くと、寒さをしのぐためか、地面にしっかり張り付いているカントウタンポポが菰園橋までの間に4株ほどありました。

蕾の草はカラスノエンドウ、タチイヌノフグリ、スイバなどで、昨年たくさん見つけて感激したキランソウは今月も残念ながら見つけられませんでした。クコの新芽があちこちにあり、仲間の一人が「食べられるらしいので天ぷらにしてみよう」と手際よく摘み始めました。

ここまでにカルガモ、コガモ、コチドリ3羽がいて、「ピオピオピオ」と声も良く響き、ハシビロガモの雌も見られました。

菰園橋から上流には大きな花を付けたカタバミ、色の濃いムラサキケマン、丈の低いハルジオンが可愛らしく咲いていました。川の向こう側から、遠慮がちなウグイスの声も聞こえています。

2月中旬頃は華やかだったカワツザクラもすっかり葉桜になり、その下にはハナニラがあちらこちらに咲いていて、10cmほどの高さのツクシが4本。その場所から、上流の温室の脇にはカワツザクラらしい若木が20本ほど植えられていました。土手の黄緑色のトウダイグサの花に蜜が光って見え、珍しい造りの姿をじっくり観察しました。空にはヒバリが鳴き、川の中にカワウ1羽が泳いでいました。その先は相模縦貫道の橋げたが低いために、立って土手を渡れないので腰を屈めて上流に進むと、川には多くのコガモやカルガモに混じってマガモ、ハシビロガモのペアが仲良く泳いでいました。護岸工事がすぐ近くで行われていたようなのに、多くの水鳥がいます。

帰り道では、セイヨウアブラナが蛇籠から芽生えたのか土手の下が花盛りでした。区別の分かりにくい仲間ですが、最初に観察したセイヨウカラシナとの違い(セイヨウカラシナは葉が茎を抱かない)などを確認できて良かったです。

帰り道では、以前にコメツブツメクサがあったという場所を探しましたが見当たらず、オランダミミナグサ、ノボロギク、タネツケバナが咲いているだけでした。ここでは、タチイヌノフグリが愛らしい花を見せてくれました。

昆虫はモンシロチョウが8頭、キタテハ1頭が飛んでいて、ツノゼミの仲間のトビイロツノゼミがエノキにとまっていました。

最後に色のコントラストが明瞭なモズの雄とカワセミを観察して終了しました。

(浜之郷 河野正子)

モズのヒナと巣立ち

3月下旬のある日、木立のある藪にさしかかると、1羽のモズが「キィキィキィキィ！」と激しく警戒する鳴き声をだして、周辺を落ちつかなく飛んでいる。

この時期、野山歩きをしていると、モズの警戒する鳴き声があちらこちらで、よく聞こえる。

しばらく歩くと、藪の中からヒナの鳴く声がする。そっと近づいて中を覗くと、巣の中に5羽のモズのヒナがいた。



巣の中の1羽のヒナは親が餌を運んできたと思ったのか、大きな黄色の嘴を開けた。ほかのヒナは身をすくめたように、小さく固まり、大きな目を開いている。

翌日、気になり同じ場所に行ってみた。藪の中の巣を見ると、5羽のヒナの姿はなく、空っぽになっていた。少し心配になり周辺を歩いてみると、上空でトビに3羽のカラスが絡んでいる。

もしかしてカラスに食べられてしまったか、と不安がよぎった。親モズがしきりに周辺を飛んで、行ったり来たりしている。

ふと、アシの茂った藪を見ると、1羽のヒナがアシに止まっていた。なぜかほっとした。小さいカメラをヒナに向けてシャッターを押した。すると側

で警戒の声で鳴いていた親モズが、益々危機せまる大きな声で鳴く。アシの上で静かに目を閉じていたヒナが目を開けた。

モズの繁殖期は他の野鳥より早く始まる。そして繁殖期には雄雌とも嘴が黒褐色に変化すると聞いたことがある。



（香川 目黒啓子）

ウグイス

3月に入って、ウグイスの声が松林に響き渡る。今年は朝夕に、谷渡りという鳴き声を楽しませてもらった。鳥の居住環境の変化なのか、海岸付近の住人たちにとってはすばらしい環境を作ってくれていると自然に感謝している。

（菱沼海岸 井川洋介）

「神奈川メダカサミット」に参加して

私の所属する三翠会のメンバーから情報があり、4月1日、小田原市で開催されたメダカサミットに参加してきました。

主催は第5回神奈川メダカサミット実行委員会、構成共催団体には酒匂川水系のメダカと生息地を守る会や藤沢、三浦、葉山、逗子のメダカ関係に關係して活動している会、神奈川水産技術センター内水面試験場などです。

午前9時にN製薬会社の中を借りて受付が始まり、その後20人ほどが集まる毎に、「たんぼの恵を感じる会」がフィールドにしている田んぼを「水田ビオトープ」、「メダカの池とメダカ（鯉でなく!）のぼり」、「流路変更の水門と道路工事」、「南北をつなぐ代替水路計画」など7ヶ所の見学ポイントに、メダカの会のメンバーや小田原市職員、神奈川県職員などがパネルや水槽を説明してくれました。

行政の職員が何人も参加し「来年はメダカのための水路ができています」と語っていました。サミットの後援は、新江ノ島水族館、社団法人小田原青年会議所、小田原市市民メダカ会議、NPO法人あしがら農の会など、様々な分野の団体が関わっていて良いなと思いました。

周りの小さな水路では、多くのメダカを見ることができました。小学校入学前の女の子を連れた母親は2年目の参加ということや、一緒に田植えなどの行事から参加したお蔭で、ご飯を粗末にしなくなったことを話してくれました。

歩いていると夏日のような暑さでしたが、小田原市ふるさとの原風景百選になっているという満開の桜並木の下、七草粥と豚汁を美味しく頂きました。

食事を済ませて、土手下の田んぼにあるという神奈川県絶滅危惧種で茅ヶ崎では見られないデンジソウ（田の字の草という意）の小さな植物を教えてくださいました。

午後の第1部は「コウノトリの里・豊岡から何を学ぶか」と題して、宇根豊氏（農と自然の研究所代表）と立川周二氏（東京農大農学部准教授）による1時間の対談がありました。

コウノトリの里づくりにも関わった宇根氏は、「茶わん1杯のごはんは、3株の稲株から生まれ、その3株の周りにはオタマジャクシが30匹育っています。オタマジャクシを、カエルを育てるために、赤とんぼを守るために、メダカの姿を楽しむために、ご飯を食べると考えてください」と話されました。

午後の第2部は第3分科会の「新しい農業、これからの田んぼ」に参加しました。以前にテレビで見えて、ぜひ話を聞いてみたいと思っていた西村いつき氏が特別報告されました。この方は、兵庫県但馬県民局豊岡農業改良普及センター普及主査の方で、「コウノトリ育む農法の意義と将来展望」と題して非常に短い時間でしたが、心に響く報告でした。2002年からコウノトリプロジェクトチームの一員として取り組み始めた頃は、農家の方から「コウノトリは稲の害鳥であるのに、なぜ甦らせようとするのか」と嫌がられていたが、調査したデータを解りやすく示してコウノトリは悪さをしないし、稲刈りの終わった田んぼに、冬の間、水を張る「冬水田んぼ」は収穫量が多いことなどを夜な夜な農家を回って説明したことなどを話されました。

「小学生が1年間来ても、次の年には田んぼに来なくなるのですが、継続する方法は？」の質問には、「豊岡の学

校の先生は素晴らしいんです。4年生では田んぼの生き物調査を、5年生で米作りと、コウノトリ育む農法を継承させたいと取り組んでいます。」と答えました。非常に謙虚で穏やかに周りを取り込んでいる様子でした。

茅ヶ崎の自然団体に比べ、この実行委員会のメンバーが30代、40代と若いことを羨ましく感じ、そして渡された中身の濃い資料をしっかりと読まなくてはと強く思うサミットでした。

(浜之郷 河野正子)

「ウグイス初鳴き」

香川1丁目で4月9～10日の2日間、ウグイスが鳴きました。「ホーホケキョケキョ」と「ケキョ」が繰り返され、まだ上手な鳴き方ではありませんでした。

去年は3月初旬、満開の梅林で鳴き出しましたが、今年は鳴きませんでした。4月の花祭りが過ぎたところで初鳴きとなったわけです。

(香川 池田卓郎)

里山公園の春の鳥類

県立茅ヶ崎里山公園の西駐車場には、多くの自動車が駐車できるようになった。快適な公園になり、憩いや癒しを求める多くの家族連れやハイキングをする人でさらににぎわうことだろう。

3月29日は天気がよく、探鳥日和で里山公園方面へと出かける。お相手役は近所の中学生で、数年来の年の差のある野鳥の友である。よく五感がはたらき、自然の事物にすぐ反応できるところが気に入っている。

駐車場からしばらく歩くと、エナガ3羽、ヤマガラ3羽、シジュウカラ2羽の順で新芽が吹く林から林へ移動す

る混群をみつけた。アオキの赤い実をくわえて同じ方向へ飛んでいくカケス1羽も混群のなかまだったのだろうか。

芹沢の池からきつね坂方面に向うと、途中の左手に三面コンクリートの水路がある。うす暗い場所でわずかな水の流れがある。ここでヒガラ1羽、ヤマガラ2羽、シジュウカラ3羽が人の気配も気にせず、水浴びをしている。その側の枯木では1羽のコゲラが餌とりに夢中であるが、水浴びを終えた3種の小鳥は雑木林へ姿を消していった。

街中といえる我が家の庭にソウシチョウが前年12月から1月まで1日3回ほどやってきた。その後の行方はわからないが、芹沢の池付近の急坂の片側に生える竹藪でソウシチョウ13羽とヤマトアオダモの大木付近の竹藪で7羽を観ることができた。カケスが鳴きながら数羽飛んでいた。

● 今回の探鳥で確認できた鳥

シジュウカラ(2羽+3羽)、エナガ(3羽)、ヤマガラ(3羽+3羽+2羽)、カケス(1羽+4羽)、キジ(3羽)、スズメ(12羽)、ヒヨドリ(4羽)、ツグミ(1羽)、アオジ(1羽)、カシラダカ(1羽)、オオタカ(♂1羽・飛翔)、トビ(1羽)、ハシブトガラス(12羽)、ハシボソガラス(2羽)、コゲラ(1羽)、ヒガラ(1羽)、ソウシチョウ(13羽+7羽)、ウグイス(2羽)、ムクドリ(6羽)、カワラヒワ(8羽)、カルガモ(3羽)、モズ(♂1羽)、コジュケイ(1羽・鳴き声)、キジバト(2羽)、ツバメ(1羽・飛翔)、ハクセキレイ(♂1羽♀1羽)、シロハラ(1羽)、メジロ(3羽+5羽)、ホオジロ(♂1羽)、シメ(1羽)

(文化資料館 小室明彦)

「シラカバの樹液」の追記

筆者は本誌(『茅ヶ崎 自然の新聞』第274号)に「シラカバの樹液」を執筆したが、国立科学博物館植物研究部の門田裕一先生が、お葉書を下されたので、先生の許可を得て紹介します。

『274号の「シラカバの樹液」を拝見し、アルタイ山脈の山小屋で、シラカバの樹液をいただいたことを思い出しました。

ほのかに甘い清々しい味でした。私はこのところロシアの山から離れてしまっていますが、いずれ又再訪したいと思っています。』

(藤沢市藤が岡 小原 敬)

柳島の花ごよみ

雨のために定例観察会を一週間延ばした4月10日、柳島青少年キャンプ場の周りを歩きました。今日は海岸植物の保全活動をしている「ゆい」のメンバーの方が参加されました。

キャンプ場脇の左岸用水終末処理場側のコンクリートの壁面にグミが広い範囲で美しく花を咲かせていました。この時期に花が見られるのはナツグミかしら? などと言いながら調べてみると、春に開花する種はアキグミ、ナツグミ、マメグミとなっていて、花の咲く時期ではなく、果実の熟する時季にちなんで命名しているようです。

花が細く葉腋に5~6個が短い柄で直立してつき、果実は秋に熟するのがアキグミ。花が筒型で子房の上でくびれ、葉腋に1~3個が長柄で垂れ下がってつき、夏に熟するのがナツグミとなっています。取りあえず、ここのグミはアキグミと判りました。

『湘南植物誌』の検索表によると、夏緑性では他にマメグミがあり、常緑性で

秋に開花し春に実が熟すものにオオバグミ、ツルグミ、ナワシログミなどが出ていました。ちなみに、マメグミは茅ヶ崎にはなく、ツルグミやナワシログミもありません。

少し進むと、左側はサンゴジュ、トベラに混じってタブノキの芽立ちが目の高さで見られました。タブノキは混芽ということは知っていても、なかなか目にする機会がなかったのですが、花芽と葉芽がどのようにになっているのか改めて観察できました。

タブノキの混芽は数枚の葉芽が中心にあり、その周りに何本かの花芽が囲むように出ています。この時期でないと見られないようでした。

それから海岸に出る道の右側には、カシチゴが大きな白い花を付けていました。花の季節でないと気づかなかった場所でした。

海岸に至るまででは、セイヨウタンポポ、ノグシ、セイヨウカラシナ、カタバミ、オニタビラコなどに加えカラスノエンドウ、ヒメオドリコソウ、オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、キュウリグサなどがみられました。

海岸まで出ると、砂防用のトベラやシャリンバイと一緒に植えられている所に行き、分かっているつもりでも間違えそうな両者の違いを確認しました。

キャンプ場のネット近くでは、この場所に移植されたようなコウボウシバ、コウボウムギの花が少しですが見られ、ハマエンドウの鮮やかな紫紅色の花が広い範囲に美しく咲いていました。

(浜之郷 河野正子)

湘南地方のショウロ(松露)

ショウロは、年に春と秋(3~4月と10月の2回)、主に海辺や湖畔の若いクロマツ林内の砂地に点々と発生するショウロ科の

腹菌類である。ショウロ(子実体)は白色の細かい菌糸束(キノコ本体である菌糸の束)をつくって砂の中に広がり、クロマツの根に白いサンゴ状の菌根(生きた樹木の細根と菌糸が結合してつくる栄養体)をつくる。地中生～半地中生で卵形からやや歪んだ球形をしている。白色で径1.5～4cmで、手でこすると淡赤褐色に変色する。外生菌根性である。

ショウロは、胞子が十分熟すると、自ら液状に崩壊する。黄褐色の粘質物が臭気を発して小動物を誘い、そのからだの一部に付いて胞子を伝播する。子孫を維持するためのショウロの知恵といえる。きのこの色の変化により白いものをコメショウロ、色づいたものをアワショウロ、ムギショウロ、最後はモチショウロなどと呼ばれる。特にコメショウロは香りが高く上等产品である。

名前の由来は、マツのエキスを吸収して生育するキノコ、すなわち「松露」と名づけられたと思われる。癖のないさわやかな風味と干しリンゴに似た歯ざわりがあり、和風のお吸物に向く。昭和30年頃までは、春と秋に湘南海岸のクロマツのいたる所に発生し、付近の八百屋の店頭にも並べられ、湘南地方の“名産品”となっていた。藤沢にはこのキノコを入れた「松露羊羹」という銘菓を製造販売している豊島屋本店があるが、今日では湘南地域でショウロが入手できず、山陰地方の業者から蜜漬けを買っている。

昭和58年4月16日、藤沢市辻堂海岸で、神奈川キノコの会会員4名が、2～3時間で合計150個のショウロを採取した。その後、昭和60年4月7日に脇田正二氏、遠藤三枝氏などが辻堂の海浜公園内で153個を採取した。これらの数は湘南海岸での近年稀にみる採取記録である。

湘南海岸のショウロに詳しい茅ヶ崎市旭が丘の太田三郎氏によると、ショウロは昭和30年頃までは、藤沢から平塚にいたるクロマツ林内の地中のいたるところに発生が見られ、茅ヶ崎海岸では小バケツ1杯ほども採れたという。

「県植物ときのこの会」連絡誌2号(昭和60年9月18日)の誌面で、井川洋介氏は、ショウロは地中で白か薄いピンク色の血潮のない柔肌を見せている時がほのかに香をただよわせており、ミツバなどを入れたスマシ汁にして食べると美味である。南湖院があった頃、よく熊手を手にショウロを集めて売りに行く人がいた。ショウロは結核に効くとの噂であるが真偽のほどは解らない、と記しておられる。

井川氏の採取法は、ショウロ1つ掘り当てると、直径20cm位の円を描き深さ3cmを掘る。ショウロの発生する範囲:松の幹から細根(根毛)の分布する範囲内で、樹高や周囲の環境により様々。

落葉を燃料や肥料などに利用しなくなり、近年では落葉が堆積する一方で、クロマツ林そのものの衰退とゴミやビニール製品などの捨て場などが多くなり、次第に希少種になってきている。

ショウロの衰退の原因は、まだ完全に解明されていない。①クロマツ林が減少した。②クロマツ林に人が入るようになり、ゴミや踏みつけ(踏圧)により林内の植生が変化した(2～3年前からススキが生え出した。)③植生の変化によりクロマツの樹勢が衰えたことなどが考えられる。

ショウロは、一般的に老松よりも若木の根元(株元ではない)に発生する。神奈川キノコの会員の遠藤隆氏は、発生地は松は15～20年生で、その林床には雑草や落葉の量は少なく、日光が射し込む場所であったと述べている。

人工栽培が非常に難しいキノコなので、今後、マツタケと同様“まぼろしの味”となってしまいかもかもしれない。

関東地方のショウロ産地として、湘南と共に千葉県九十九里浜海岸が知られている。

(横浜市 生出智哉)

「茅ヶ崎ウグイス回廊作り」

茅ヶ崎北部の丘陵地と海岸の松林には、春にウグイスが鳴きます。

ウグイスが南北の木々を渡りながら行き来できるよう、連なる樹木帯を何本か作れたらいいなと思います。

ウグイスの習性を知らないのですが、ウグイスは夏には丹沢などの山地に行くと言われていますので、茅ヶ崎の北と南くらいはウグイスならひとつ飛びでしょう。

茅ヶ崎の中間地のあちこちでウグイスの鳴き声が聞こえたらいいなと思います。

(香川 池田卓郎)

シメの羽を拾う

県立茅ヶ崎里山公園内で、小鳥が何かに襲われたとみられ、丘陵の小径に羽だけが散在していた。初列、次列、三列風切羽、尾羽だけを徹底的に探し、拾い集めて羽図鑑で調べた結果、シメという野鳥であることを確認する。

第1回自然観察指導員講習があった。その受講中か他の講習会の席上で「落ちていた羽があった時、あなただったらどうしますか。」という問いに、「拾って胸のポケットや帽子に挿す。」とか「家に持ち帰って部屋に飾っておく。」という声があがった。しかし、その答えは「自然に帰すこと(そのままにしておく)」である。それ以来30年以上、羽が落ちていても拾うことはしなかった。しかし鳥類の調査という目的であれば、その羽を採取資料とし、標本とし保存することで、その意義や価値があることを感じた。

(文化資料館 小室明彦)

ツバメが舞う海岸

3月31日、東海岸に夏鳥のイワツバメが、20羽渡ってきました。毎日のように海岸を散歩していますが、前日にはいなかったのが、夕方4時頃に遊歩道を低く飛ぶイワツバメに出会いました。昨年より早いと思います。ツバメも、3月28日には矢畑で確認されています。

毎年、イワツバメの集団が海岸の砂防林の松林に暮らし、砂浜をすごい速さで低く飛びかっけて、砂をすくいあげては松林に消えていきます。

茅ヶ崎市内に渡ってくるツバメの種類は、今までの調べでは街中で見られるツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、アマツバメが確認されています。それぞれ住み分けて暮らしているようです。

ツバメは人と関わって暮らしているので、街中に多く見られ、人家の軒下などに巣を作り子育てします。

イワツバメは海岸や河川、山地などで巣を作ります。のどからお腹は白く、尾羽は短く、足と指は白い羽毛でおおわれています。

コシアカツバメは山地などで確認されています。コシが赤いのでツバメと見分けが出来ます。

アマツバメは山地で確認されています。翼は飛ぶと鎌のように広がります。全身が黒く、喉と腰は白く、尾はツバメと同じです。

留鳥では、ヒメアマツバメが海岸で暮らしているのが確認されています。これから夏空の暑い太陽の中、子育てにがんばるツバメを探してみませんか。

ツバメは巣立った後、親と同じ大きさになっても昆虫をもらっている姿を見ますが、南に渡る秋になると、上手に昆虫をとる姿に頼もしさを感じます。

野鳥を探すには、根気と好奇心が必要ですが、野鳥の形、鳴き声、住み分け(生活の環境)などで、どのような野鳥なのかを知ることが出来ます。

茅ヶ崎の近辺では10種類は探せるでしょう。耳を澄まして五感をフル回転して挑戦してみませんか。

(東海岸 河村まき子)

ホンビノスガイ

今年の3月号に、この貝についての解説めいた記事を書かせていただいた。漂着物の楽しみはイマジネーションをかきたてること、どんな角度から考えても我流に筋を立て解説ができることであり、その結果、幸いにして客観的に正当化されれば、宝くじにでも当たったような気分を味わうことができる。自分の気持ちを豊かにできるということである。つまり自画自賛ということ。実はゴールデンウィークの始まる前に、東海岸の地引網前の海岸に再びホンビノスガイの貝殻7-8個を見つけた。その脇にホタテガイの貝殻も同数近く見つけた。3月号に書いたイマジネーションの答えがどうもバーベキュー用に持ち込まれた食材だったのではないかと思われた。



(菱沼海岸 井川洋介)

カツオノエボシ

夏の海水浴中に、刺されるとピリッと痛みを感じさせるクラゲ。浜に打ちあがった姿は空気枕のようで風が吹けば飛んでしまいそうな実態である。

5月9・10日と立て続けに東海岸の砂浜に打ちあがった。相模湾の水温は22度くらいに上がっている。ホンダワラの仲間の海藻もかなり多く打ち上げられ、プラスチックごみと共に浜を汚していた。



(菱沼海岸 井川洋介)

オオミスナギドリ、ハシボソミスナギドリ

5月9日、オオミスナギドリの漂着死体が東海岸ヘッドランド東側に打ちあがった。

5月10日、今度はハシボソミスナギドリの幼鳥の肢体が3羽打ちあがっていた。前者は体長も羽も大きく、特に羽の裏側が白いのが特徴であり、後者は羽の表裏とも黒っぽく、体も細く小さいのが特徴である。

(菱沼海岸 井川洋介)

お知らせ

●「茅ヶ崎自然に親しむ会」

『夏休み自然教室』@文化資料館

日時：7/21、22(土、日)

『寒川・大蔵から茅ヶ崎境を歩く』

※ 夜の観察会です

日時：9月15日(土)

問い合わせは、

安井利子(52-3856)まで

●「清水谷を愛する会」

日時：7月1日(日)

日時：8月5日(日)

日時：9月2日(日)

各日とも9時30分~15時

集合場所：市民の森駐車場(堤)

問い合わせは、

田部許子(51-2955)まで

●「柳谷の自然に学ぶ会」

『水生生物をみよう』

日時：7月22日(日)

『トンボをみよう』

日時：9月23日(日)

10時~12時

集合場所：県立里山公園 風のテラス

問い合わせは、

野田晴美(51-8489)まで

●「三翠会」

三翠会では、市内の川や水辺の生きもの調査やタゲリをはじめとする野鳥観察、お米(タゲリ米)づくりのお手伝いなどに取り組んでいます。ご協力いただける方は、下記までご連絡下さい。

事務局：河村まき子(87-8313)

●「駒寄川水と緑と風の会」

『水質検査とハンゲショウの観察』

日時：7月1日(日)

『香川公民館南側雑木林の観察』

日時：8月5日(日)

『夜鳴く虫の観察』

日時：9月2日(日)

各日とも13時30分から

集合：民俗資料館(旧和田家住宅)

問い合わせは、

池田尚子(52-8919)まで

記事募集!

「自然の新聞」では、みなさまからの投稿お待ちしております。メール、FAX、手紙でOKです。

FAX：0467-85-1733

メールアドレス：

shiryokan@city.chigasaki.kanagawa.jp

鎮守の森の調査

鎮守の森といわれる、社寺林は社寺の特性ゆえ、その地域本来の植生などが保全されていると考えられています。

文化資料館では定期的に勉強会を開き、調査を市民の皆さんと協力して実施していきたいと考えておりますので、ご興味のある方は、文化資料館までご連絡ください。

